

- (1) 法人税申告書とは
- (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

# (1) 法人税申告書とは

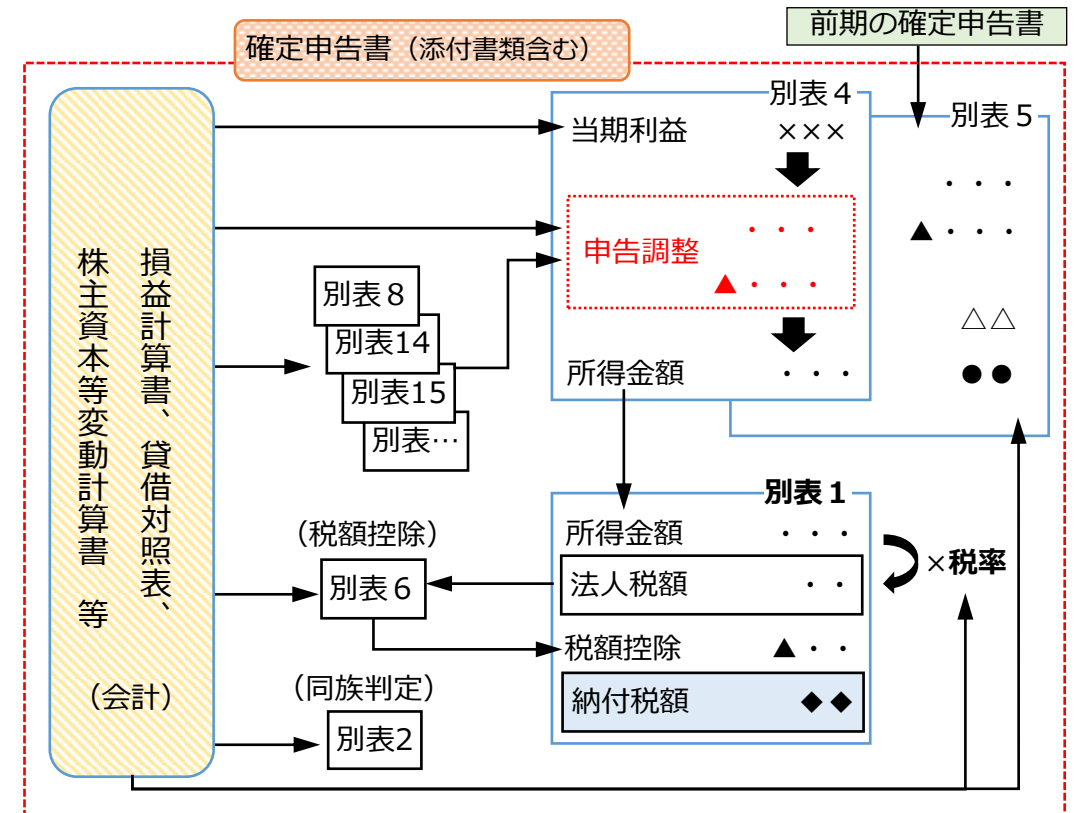
- 法人税申告書及びこれに添付する明細書（別表）は、別表1《各事業年度の所得に係る申告書－内国法人の分》から別表20《退職年金等積立金に係る申告書－退職年金業務等を行う法人の分》まであります。申告に当たっては、全ての法人が全ての別表を作成しなければならないというわけではなく、法人の活動内容や決算の状況等によって作成を要する別表は異なります。
- また、毎年度の税制改正の内容に応じて各別表の内容が変わります。国税庁ホームページでは、毎年度の税制改正に対応した別表を公表していますので、各事業年度に対応した別表を使用してください。
- 法人税申告書と貸借対照表や損益計算書などの添付書類（17ページ参照）を所轄税務署に提出することで申告の手続は完了します。

- 法人税申告書の様式については、国税庁ホームページ「[法人税及び地方法人税の申告（法人税申告書別表等）](#)」をご確認ください。

【法人税及び地方法人税の申告（法人税申告書別表等）】



## 【確定申告書の全体像（イメージ）】



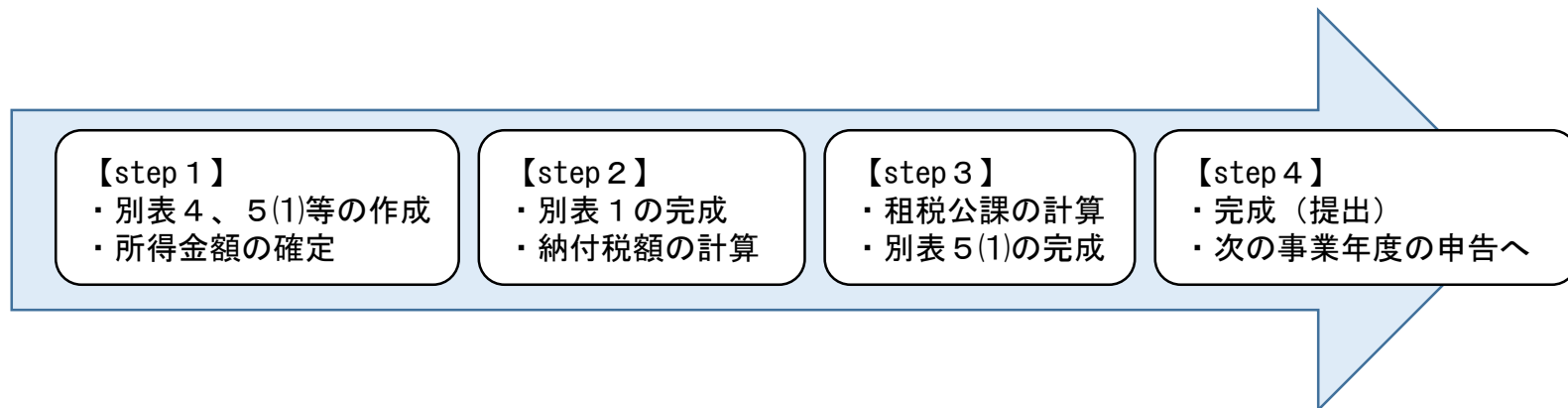
## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

- 法人税申告書の別表には、その計算過程で他の別表の金額などを参照する場合がありますため、法人税申告書は、その作成について一定の順序があります（例えば、別表1や別表4には、他の別表で計算された金額を転記する欄があります。）。
- 次のページからの設例では、中小法人が申告書を作成する際の手順について、作成イメージとして大まかな流れを紹介していますが、実際の申告に当たっては、この設例に登場する別表以外の別表を作成しなければならない場合があることに注意してください。
- 各別表の様式や記載要領について、詳しくは、国税庁ホームページ [「法人税及び地方法人税の申告（法人税申告書別表等）」](#) をご確認ください。
- この手引には、別冊として「申告書作成上の留意点」と「中小企業者の判定等フロー」があります。実際の申告に当たっては、これらの別冊もご確認ください。

【法人税及び地方法人税の申告  
（法人税申告書別表等）】



### 【確定申告書の全体像（イメージ）】



## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

【設例】本設例で使用する貸借対照表、損益計算書及び申告参考事項は次のとおりです。

(貸借対照表)

### 貸借対照表

X4年×月×日現在

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
流動資産	×××	流動負債	×××
.....		.....	
固定資産	×××	納税充当金	150,000
.....		固定負債	×××
.....		.....	.....
		純資産の部	
		株主資本	
		資本金	10,000,000
		利益剰余金	×××
		繰越利益剰余金	2,400,000
		.....	×××

別表5(1)「26」④欄と一致します。

別表5(1)「32」④欄と一致します。

別表5(1)「25」③④欄に転記します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### (損益計算書)

損 益 計 算 書		
自 X3年×月×日 至 X4年×月×日		
I 売上高		×××××
II 売上原価		
1 期首商品棚卸高	×××	
2 当期商品仕入高	<u>×××</u>	
合計	×××	
-----		
III 販売費及び一般管理費		
.....	×××	
減価償却費	×××	
交際費	500,000	
寄附金	50,000	<u>×××</u>
営業利益		×××
-----		
税引前当期純利益		×××
法人税、住民税及び事業税		<u>150,000</u>
当期純利益 (又は当期純損失)		<u>600,000</u>

別表15「6」(交際費)欄に転記します。

支出した寄附金の内容に応じて、別表14(2)「1」欄から「3」欄までに転記します。

別表5(2)「31」欄に転記します。

別表4「1」①欄に転記します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### (申告参考事項)

#### 1 交際費等に関する事項（別表15を使用）

当期において、得意先に対するお中元及びお歳暮の贈答費用などとして500,000円を支出し、交際費勘定に計上しており、その全てが税務上の交際費等に該当します。

#### 2 一括償却資産に関する事項（別表16(8)を使用）

当期首において、150,000円のデスクトップパソコン3台の取得及び事業供用をし、一括償却資産として資産計上しています。また、当期において、減価償却費として150,000円計上しています。

#### 3 寄附金に関する事項（別表14(2)を使用）

当期において、A神社（宗教法人）の祭礼に対して寄附金として50,000円を支出し、寄附金勘定に計上しています。

#### 4 欠損金の繰越しに関する事項（別表7(1)を使用）

前期において、（青色）欠損金額100,000円が発生しています。

### (その他の前提条件等)

この設例においては、次の前提条件を基に申告書を作成しています。

- ① この法人は、青色申告の承認を受けています。
- ② この法人は、前期においても適正に確定申告書を提出しています。
- ③ この法人は、各種制度における中小法人等の判定において、中小法人等に該当します。
- ④ この法人は、特定同族会社に該当しません。
- ⑤ この法人は、通算法人に該当しません。
- ⑥ この申告に係る事業年度は、令和4年4月1日以後に終了するものであり、事業年度の月数は12か月です。
- ⑦ 損益計算書の「法人税、住民税及び事業税」は、その全てが納税充当金の繰入れによるものであり、これ以外に当期に繰り入れた納税充当金はありません。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### 【Step 1】 所得金額の確定（別表4、5(1)、5(2)、7(1)、14(2)、15及び16(8)の作成）

#### ① 別表5(2)…当期中の租税公課の納付税額等の記入

租税公課の納付状況等に関する明細書

事業年度	X3・X・X X4・X・X	法人名	
税目及び事業年度	期首現在未納税額	当期発生税額	当期中の納付税額
			③ 充当金取崩しによる納付 ④ 仮払経理による納付 ⑤ 損金経理による納付
	①	②	③ ④ ⑤
法地	X3 : X : X	1 XXXX円	XXXX円
人方	:	2	
税法	当期分	3	
及人	中間	4	
び税	確定	5	
	計		

別表五(二) 令四・四・一以後終了事

【別表5(2)】  
この明細書は、利益積立金額の計算上控除する法人税等の税額の発生及び納付の状況並びに納税充当金の積立て又は取崩しの状況を明らかにするために使用します。

別表4「4」①②欄に転記します。

別表5(1)「26」③欄に転記します。

納税充当金の取崩しにより、事業税などの損金算入のものを納税した場合には、別表4「13」①②欄に転記します。

別表5(1)「26」②欄に転記します。

別表5(1)「26」④欄と一致します。

期首納税充当金	30	XXXX円	取崩	損金算入のもの	36		
繰入額	損金経理をした納税充当金	150,000	の	損金不算入のもの	37		
						38	
取崩額	計 (31) + (32)	150,000	他	仮払税金消却	39		
	法人税額等 (5の③) + (10の③) + (15の③)	XXXX		計	(34) + (35) + (36) + (37) + (38) + (39)	40	XXXX
	事業税及び特別法人事業税 (19の③)			期末納税充当金 (30) + (33) - (40)	41	150,000	

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ② 別表5(1)…前期の確定申告書及び貸借対照表から転記

利益積立金額及び資本金等の額の計算に関する明細書

事業年度	X3・X・X	法人名	
	X4・X・X		

別表五(一) 令四・四・一以後終

I 利益積立金額の計算に関する明細書				
区分	期首現在利益積立金額 ①	当期の増減		差引翌期首現在利益積立金額 ①-②+③ ④
		減 ②	増 ③	
利益準備金	1			
積立金	2			
	3			
繰越損益金(損は赤)	25	X X X	2,400,000	2,400,000
納税充当金	26	X X X	150,000	150,000

II 資本金等の額の計算に関する明細書				
区分	期首現在資本金等の額 ①	当期の増減		差引翌期首現在資本金等の額 ①-②+③ ④
		減 ②	増 ③	
資本金又は出資金	32	10,000,000		10,000,000
資本準備金	33			
	34			
	35			
差引合計額	36	10,000,000		10,000,000

#### 【別表5(1)】

この明細書は、

- ① 法第2条第18号《定義》及び令第9条《利益積立金額》に規定する利益積立金額を計算するため、
  - ② 法第2条第16号及び令第8条《資本金等の額》に規定する資本金等の額を計算するため、
- に使用します。

前期の別表5(1)の「差引翌期首現在利益積立金額④」の各欄の金額を転記します。

「期首現在利益積立金額①」には、繰越利益剰余金の当期首残高（マイナスの場合は△印を付してください。）を記載し、同一金額を「減②」に記載することによって「期首現在利益積立金額①」を0とし、改めて繰越利益剰余金の当期末残高を「当期の増減」の「増③」に記載します。

前期の別表5(1)の「差引翌期首現在資本金等の額④」の各欄の金額を転記します。



## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ③ 別表4…損益計算書等から当期利益等を転記

所得の金額の計算に関する明細書

		事業年度	法人名
		X3・X・X X4・X・X	
区分	①	処	
		留保	社外流出
当期利益又は当期欠損の額	①	②	③
	600,000 円	600,000 円	配当 その他
加	損金経理をした法人税及び地方法人税(附帯税を除く。)		
	損金経理をした道府県民税及び市町村民税		
	損金経理をした納税充当金	150,000	150,000
	損金経理をした附帯税(利子税を除く。)、加算金、延滞金(延納分を除く。)及び過怠税		その他
	減価償却の償却超過額		
	役員給与の損金不算入額		その他
	交際費等の損金不算入額		その他
算	通算法人に係る加算額 (別表四付表「5」)		外※
	小計		外※

別表4 令四・四・一以後終了事業年

#### 【別表4】

この明細書は、損益計算書に掲げた当期利益の額又は当期欠損の額を基として、いわゆる申告調整により税務計算上の所得金額若しくは欠損金額又は留保金額を計算するために使用します。

なお、各欄の記載に当たり、その各欄の算定を示す他の別表がある場合には、まず当該他の別表を記載して、その結果を移記してください。

(注) 沖縄の認定法人の課税の特例など特殊な調整事項のない法人については、この明細書について「簡易様式」を御利用ください。

「総額①」から「社外流出③」の合計額を減算した金額を記載します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ④ 別表15…損益計算書から交際費の額500,000円を転記するとともに、交際費等の損金不算入額を計算

交際費等の損金算入に関する明細書

		事業年度	X3・X・X X4・X・X	法人名		
支出交際費等の額 (8の計)	1	円	500,000	損金算入限度額 (2)又は(3)	4	円
支出接待飲食費損金算入基準額 (9の計) × $\frac{50}{100}$			0	損金不算入額 (1)-(4)	5	円
中小法人等の定額控除限度額 (1)と((800万円 × $\frac{12}{12}$ 又は(別表十五付表「5」)のうち少ない金額)	3		500,000			0
<b>支出交際費等</b>						
科	目	支出額 6	交際費等の額から 控除される費用の額 7	差引交際費等の額 8	(8)のうち接待 飲食費の額 9	
		円	円	円	円	
交	際	500,000	0	500,000	0	
	費					
計		500,000	0	500,000	0	

別表十五 令四・四・一以後終了事業年度分

#### 【別表15】

この明細書は、法人が措置法第61条の4《交際費等の損金不算入》の規定の適用を受ける場合に使用します。

交際費等の範囲と損金不算入額の計算については、タックスアンサー「[No. 5265](#)（交際費等の範囲と損金不算入額の計算）」もご確認ください。

【No. 5265（交際費等の範囲と損金不算入額の計算）】



損金不算入額が算出された場合には、別表4「8」①③欄に転記します。

交際費等に該当する支出を交際費以外の支出科目で経理している場合には、その支出科目の異なるごとに別欄に記載します。

分子の空欄には、当期の月数（暦に従って計算し、1か月未満の端数は切上げ。）を記載します。

中小法人等の判定が必要です。詳しくは、この手引の別冊「中小企業者の判定等フロー」の5ページをご確認ください。

通算法人に該当しないため、「又は（別表十五付表「5」）」を二重線で抹消します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ⑤ 別表16(8)…一括償却資産の損金算入に関する明細書の作成

一括償却資産の損金算入に関する明細書

		事業年度 又は連結 事業年度	X3・X・X X4・X・X	法人名			
事業の用に供した 事業年度又は連結事業年度	1	・	・	・	・	・	(当期分)
同上の事業年度又は連結事業年度において事業の用に供した一括償却資産の取得価額の合計額	2	円	円	円	円	円	450,000
当期の月数 (事業の用に供した事業年度の中間申告又は連結事業年度の連結中間申告の場合は、当該事業年度又は連結事業年度の月数)	3	月	月	月	月	月	12
当期分の損金算入限度額 (2) × $\frac{(3)}{36}$	4	円	円	円	円	円	150,000
当期損金経理額	5						150,000
差 損金算入不足額 (4) - (5)	6						0
引 損金算入限度超過額 (5) - (4)	7						0

一括償却資産を事業の用に供した事業年度を、左の欄から早い順に記載します。

#### 【別表16(8)】

この明細書は、法人が一括償却資産について令第133条の2《一括償却資産の損金算入》の規定により損金算入額等の計算を行う場合に使用します。

(注) 「一括償却資産」の対象資産とは、令第133条の2第1項に規定する減価償却資産で取得価額が20万円未満であるもの（貸付け（主要な事業として行われるものを除きます。）の用に供したものと及び一定のものを除きます。）をいいます。

事業の用に供した一括償却資産の取得価額の合計額を記載します。

損金算入限度超過額が算出された場合には、別表4（加算・留保）、別表5(1)（利益積立金額の計算に関する明細書の当期の増）に転記します。

別表十六(八) 令四・四・一以後終了事業年度又は連結事業年度分

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ⑥ 別表4…所得金額の仮計の算出

所得の金額の計算に関する明細書

		事業年度	×3・× ×4	法人名		
区分		総額	処		分	
			留保	社外流出		
		①	②	③		
当期	利益又は当期欠損の額	1	600,000	600,000	配当 その他	円
加算	損金経理をした法人税及び地方法人税(附帯税を除く。)	2				
	損金経理をした道府県民税及び市町村民税	3				
	損金経理をした納税充当金	4	150,000	150,000		
	損金経理をした附帯税(利子税を除く。)、加算金、延滞金(延納分を除く。 )及び過怠税	5			その他	
	減価償却の償却超過額	6				
	役員給与の損金不算入額	7			その他	
	交際費等の損金不算入額	8	0		その他	0
	通算法人に係る加算額 (別表四付表「5」)	9			外※	
	小計	10				
		11	150,000	150,000	外※	0
減算	減価償却超過額の当期認容額	12				
	納税充当金から支出した事業税等の金額	13				
	受取配当等の益金不算入額 (別表八(一)「13」又は「26」)	14			※	
	外国子会社から受ける剰余金の配当等の益金不算入額 (別表八(二)「26」)	15			※	
	受贈益の益金不算入額	16			※	
	適格現物分配に係る益金不算入額	17			※	
	法人税等の中間納付額及び過誤納に係る還付金額	18				
	所得税額等及び欠損金の繰戻しによる還付金額等	19			※	
	通算法人に係る減算額 (別表四付表「10」)	20			※	
	小計	21				
	22	0	0	外※	0	
仮計 (1)+(11)-(22)	23	750,000	750,000	外※	0	
対象純支払利子等の損金不算入額 (別表十七(二)の二)「29」又は「34」)	24			その他		
超過利子額の損金算入額 (別表十七(二)の三)「10」)	25	△		※	△	
仮計 (23)から(25)までの計	26	750,000	750,000	外※	0	
寄附金の損金不算入額 (別表十四(二)「24」又は「40」)	27			その他		

別表四 令四・四・一以後終了事業年度分

寄附金の支出がある場合、寄附金の損金算入限度額の計算(別表14(2))の前に、所得金額の仮計「26」欄を算出する必要があります。

別表14(2)「7」欄に転記します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ⑦ 別表14(2)・・・損益計算書から寄附金の額50,000円を転記するとともに損金不算入額を計算

寄附金の損金算入に関する明細書

公益法人等以外の法人の場合		公益法人等の場合	
項目	金額	項目	金額
支出した寄附金の額		支出した寄附金の額	
指定寄附金等の金額 (41の計)	0	長期給付事業への繰入利子額	25
特定公益増進法人等に対する寄附金額 (42の計)	0	同上以外のみなし寄附金額	26
その他の寄附金額	50,000	その他の寄附金額	27
計 (1) + (2) + (3)	50,000	計 (25) + (26) + (27)	28
完全支配関係がある法人に対する寄附金額	0	所得金額仮計 (別表四「26の①」)	29
計 (4) + (5)	50,000	寄附金支出前所得金額 (28) + (29)	30
所得金額仮計 (別表四「26の①」)	750,000	同上の 20又は50 相当額	31
寄附金支出前所得金額 (6) + (7) (マイナスの場合は0)	800,000	〔 $\frac{50}{100}$ 相当額が年200万円に満たない場合 (当該法人が公益社団法人又は公益財団法人である場合を除く。)]は、年200万円	32
同上の <del>2.5又は1.25</del> 相当額	20,000	の公益社団法人又は公益財団法人の公益法人特別限度額 (別表十四(二)付表「31」)	33
期末の資本金等の額又は資本金の額及び資本準備金の額の合計額若しくは出資金の額 (別表五(「36の④」)又は(別表五(「32の④」)+「33の④」) (マイナスの場合は0))	10,000,000	損金のうち損金の額に算入されない金額 (37) - (34) - (35)	38
同上の月数 12 換算額 (10) × $\frac{12}{12}$	10,000,000	国外関連者に対する寄附金額及び完全支配関係がある法人に対する寄附金額 (36)	39
同上の $\frac{2.5}{1,000}$ 相当額	25,000	計 (39) + (39)	40
一般寄附金の損金算入限度額 ((9) + (12)) × $\frac{1}{4}$	11,250	損金不算入額	
(4)の寄附金額のうち同上の寄附金以外の寄附金額 (4) - (19)	50,000		
損金のうち損金の額に算入されない金額 (20) - (9)又は(13) - (17) - (18)	38,750		
国外関連者に対する寄附金額及び本店等に対する内部寄附金額 (19)	0		
完全支配関係がある法人に対する寄附金額 (5)	0		
計 (21) + (22) + (23)	38,750		

別表十四(二) 令四・四・一以後終了事業年度分

【別表14(2)】  
この明細書は、法人が法第37条《寄附金の損金不算入》等の規定の適用を受ける場合に使用します。

寄附金の損金算入については、国税庁ホームページ「暮らしの税情報」[「寄附金を支出したとき」](#)もご確認ください。



支出した寄附金の区分に応じて、それぞれの欄にその支出額を記載します。  
なお、「支出した寄附金の額」の各欄には、仮払寄附金の額は含まれますが、未払寄附金の額は含まれません。

資本等を有する法人であるため、「又は1.25」を二重線で抹消します。

分子の空欄には、当期の月数（暦に従って計算し、1か月未満の端数は切捨て。）を記載します。

資本等を有する法人であるため、「20」 — 「13」 — 「17」 — 「18」により計算します。

別表4「27」①③欄に転記します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ⑧ 別表4…欠損金控除前所得金額の算出

仮計 (23)から(25)までの計	26	750,000	750,000	外※	0
寄附金の損金不算入額 (別表十四(二)「24」又は「40」)	27	38,750		その他	38,750
沖縄の認定法人又は国家戦略特別区域における指定法人の所得の特別控除額又は要加算調整額の益金算入額 (別表十一「15」若しくは別表十二「10」又は別表十一「16」若しくは別表十二「11」)	28			※	
法人税額から控除される所得税額 (別表六(一)「6の③」)	29			その他	
税額控除の対象となる外国法人税の額 (別表六(二の二)「7」)	30			その他	
分配時調整外国税相当額及び外国関係会社等に係る控除対象所得税額等相当額 (別表六(五の二)「5の②」+別表十七(三の六)「1」)	31			その他	
組合等損失額の損金不算入額又は組合等損失超過合計額の損金算入額 (別表九(二)「10」)	32				
対外船舶運航事業者の日本船舶による収入金額に係る所得の金額の損金算入額又は益金算入額 (別表十(四)「20」、「21」又は「23」)	33			※	
合計 (26)+(27)±(28)+(29)+(30)+(31)+(32)±(33)	34	788,750	750,000	外※	38,750
契約者配当の益金算入額 (別表九(一)「13」)	35				
特定目的会社等の支払配当又は特定目的信託に係る受託法人の利益の分配等の損金算入額 (別表十(八)「13」、別表十(九)「11」又は別表十(十)「16」若しくは「33」)	36	△	△		
中間申告における繰戻しによる還付に係る災害損失欠損金額の益金算入額	37			※	
非適格合併又は残余財産の全部分配等による移転資産等の譲渡利益額又は譲渡損失額	38			※	
差引計 (34)から(38)までの計	39	788,750	750,000	外※	38,750
更生欠損金又は民事再生等評価換えが行われる場合の再生等欠損金の損金算入額 (別表七(三)「9」又は「21」)	40	△		※	△
通算対象欠損金額の損金算入額又は通算対象所得金額の益金算入額 (別表七(三)「5」又は「11」)	41			※	
当初配賦欠損金控除額の益金算入額 (別表七(二)付表一「23の計」)	42			※	
差引計 (39)+(40)±(41)+(42)	43	788,750	750,000	外※	38,750
欠損金又は災害損失金等の当期控除額 (別表七(一)「4の計」+別表七(四)「10」)	44	△		※	△
総計 (43)+(44)	45			外※	

繰越欠損金の当期控除がある場合、欠損金の損金算入額の計算（別表7(1)）の前に、差引計「43」欄を算出する必要があります。

別表7(1)「1」欄に転記します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ⑨ 別表7(1)…欠損金の損金算入額を計算

欠損金又は災害損失金の損金算入等に関する明細書

事業年度		事業年度	事業年度	法人名
		X3・X・X	X4・X・X	
控除前所得金額 (別表四「43の①」)		1	788,750	円
損金算入限度額		2	788,750	円
			(1) × $\frac{50又は100}{100}$	
事業年度	区分	控除未済欠損金額	当期控除額	翌期繰越額
		3	4	5
・	青色欠損・連結みなし欠損・災害損失	円	円	
・	青色欠損・連結みなし欠損・災害損失			円
X2・X・X	青色欠損・連結みなし欠損・災害損失	100,000	100,000	0
X3・X・X	計	100,000	100,000	0
当欠損金額 (別表四「52の①」)		欠損金の繰戻し額		
期	同上のうち			
	災害損失金			
分	青色欠損金			
	合計			

別表七(一) 令四・四・一以後終

【別表7(1)】  
この明細書は、法人が、当期に欠損金額を生じた場合に、その欠損金額につき翌期以後に法第57条《欠損金の繰越し》の規定の適用を受ける場合に使用します。

青色申告書を提出した事業年度の欠損金の繰越控除については、タックスアンサー「No.5762（青色申告書を提出した事業年度の欠損金の繰越控除）」もご確認ください。

【No.5762(青色申告書を提出した事業年度の欠損金の繰越控除)】



中小法人等に該当するため、「50又は」を二重線で抹消します。

中小法人等の判定が必要です。詳しくは、この手引の別冊「中小企業者の判定等フロー」の3ページをご確認ください。

古い事業年度の中から順次補填するものとしてその控除できる金額を記載します。

翌期繰越額がある場合には、別表1「28」欄に転記します。

- ・別表4「44」①③欄に転記します。
- ・別表1「27」欄に転記します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ⑩ 別表4…所得金額の算出

差引計 (39) + (40) ± (41) + (42)	43	788,750	750,000	外※	38,750
欠損金又は災害損失金等の当期控除額 (別表七(一)「4の計」+別表七(四)「10」)	44 △	100,000		※	△ 100,000
総計 (43) + (44)	45	688,750	750,000	外※	△100,000 38,750
新鉦床探鉦費又は海外新鉦床探鉦費の特別控除額 (別表十(三)「43」)	46 △			※	△
農業経営基盤強化準備金積立額の損金算入額 (別表十二(十四)「10」)	47 △		△		
農用地等を取得した場合の圧縮額の損金算入額 (別表十二(十四)「43の計」)	48 △		△		
関西国際空港用地整備準備金積立額、中部国際空港整備準備金積立額 又は再投資等準備金積立額の損金算入額 (別表十二(十一)「15」、別表十二(十二)「10」又は別表十二(十五)「12」)	49 △		△		
特別新事業開拓事業者に対し特定事業活動として出資をした場合の 特別勘定繰入額の損金算入額又は特別勘定取崩額の益金算入額 (別表十(六)「15」-「11」)	50			※	
残余財産の確定の日の属する事業年度に係る事業税及び特別法人事業 税の損金算入額	51 △		△		
所得金額又は欠損金額	52	688,750	750,000	外※	△100,000 38,750

別表1「1」欄に転記します。  
 なお、この金額がマイナス（欠損金額）となる場合には、別表7(1)の「当期分欠損金額」欄にも転記します。



## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### 【Step 2】 法人税額及び地方法人税額の確定（別表1の完成）

#### ① 別表1…別表4から所得金額を転記

令和 <input type="text" value="X3"/> 年 <input type="text" value="XX"/> 月 <input type="text" value="XX"/> 日	事業年度分の法人税 <b>確定</b> 申告書	適用額明細書提出の有無	<input checked="" type="radio"/> 有	<input type="radio"/> 無	
令和 <input type="text" value="X4"/> 年 <input type="text" value="XX"/> 月 <input type="text" value="XX"/> 日	課税事業年度分の地方法人税 <b>確定</b> 申告書 (中間申告の場合 令和 年 月 日 の計算期間 令和 年 月 日)	税理士法第30条の書面提出有	<input checked="" type="radio"/> 有	税理士法第33条の2の書面提出有	<input checked="" type="radio"/> 有

所得金額又は欠損金額 (別表四「52の①」)	1	十億	百万	千	円	控除	所得税の額 (別表六(一)「6の③」)	16	十億	百万	千	円
法人税額 (52) + (53) + (54)	2					税	外国税額 (別表六(二)「24」)	17				

中小法人等の判定が必要です。  
詳しくは、この手引の別冊「中小企業者の判定等フロー」の1ページをご確認ください。

#### ② 別表1次葉…法人税額の計算

事業年度等	法人名	法人税額の計算	
令和 <input type="text" value="X3"/> 年 <input type="text" value="X"/> 月 <input type="text" value="X"/> 日 令和 <input type="text" value="X4"/> 年 <input type="text" value="X"/> 月 <input type="text" value="X"/> 日			
(1)のうち中小法人等の年800万円相当額以下の金額 (1)と800万円× $\frac{12}{12}$ のうち少ない金額又は(別表一付表「5」)	49	688 000	(49)の15%又は19%相当額 52
(1)のうち特例税率の適用がある協同組合等の年10億円相当額を超える金額 (1) - 10億円 × $\frac{12}{12}$	50	000	(50)の22%相当額 53
その他の所得金額 (1) - (49) - (50)	51	000	(51)の19%又は23.2%相当額 54

通算法人に該当しないため、「又は(別表一付表「5」)」を二重線で抹消します。

本設例では、適用除外事業者に該当しないことを前提とするため、「又は19%」を二重線で抹消します。  
適用除外事業者とは、その事業年度開始の日前3年以内に終了した各事業年度の所得金額の平均が15億円を超える法人などをいいますが、詳しくは、この手引の別冊「中小企業者の判定等フロー」の8ページをご確認ください。

合計額を別表1「2」欄に転記します。

分子の空欄には、当期の月数（暦に従って計算し、1か月未満の端数は切上げ。）を記載します。

## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### ③ 別表1…法人税額の確定

		十億	百万	千	円			十億	百万	千	円		
この申告書による法人税額の計算	所得金額又は欠損金額 (別表四「52の①」)	1				6	8	8	7	5	0	の分……令四・四・一以後終了事業年度等分	
	法人税額 (52) + (53) + (54)	2				1	0	3	2	0	0		
	法人税額の特別控除額 (別表六(六)「5」)	3											
	税額控除超過額 相当額等の加算額	4											
	課税土地譲渡利益金額 (別表三(二)「24」+別表三 (二の二)「25」+別表三(二)「20」)	5							0	0	0		
	同上に対する税額 (74) + (75) + (76)	6											
	課税留保金額 (別表三(一)「4」)	7							0	0	0		
	同上に対する税額 (別表三(一)「8」)	8											
	法人税額計 (2) - (3) + (4) + (6) + (8)	9					1	0	3	2	0		0
	分配時調整外国税相当額及び外国関係会社等 に係る控除対象所得税額等相当額の控除額 (別表六(五の二)「7」+別表十七(三の六)「3」)	10											
	仮装経理に基づく過大申告の 更正に伴う控除法人税額	11											
	控除税額 (9) - (10) - (11)と(18)のうち少ない金額	12											
	差引所得に対する法人税額 (9) - (10) - (11) - (12)	13					1	0	3	2	0		0
	中間申告分の法人税額	14									0		0
	差引確定(中間申告の場合はその 法人税額)税額とし、マイナスの (13) - (14)場合は、(22)へ記入	15					1	0	3	2	0		0
控除税額の計算	16												
所得税の額 (別表六(一)「6の③」)	16												
外国税額 (別表六(二)「24」)	17												
計 (16) + (17)	18												
控除した金額 (12)	19												
控除しきれなかった金額 (18) - (19)	20												
この申告による還付金額	21												
所得税額等の還付金額 (20)	21												
中間納付額 (14) - (13)	22												
欠損金の繰戻しに よる還付請求税額	23	外											
計 (21) + (22) + (23)	24	外											
この申告前の所得 金額又は欠損金額 (59)	25												
この申告により納付 すべき法人税額又は 減少する還付請求税額 (64)	26	外								0	0		
欠損金又は災害損失金等の当期控除額 (別表七(一)「4の計」+別表七(三)「9」 若しくは「21」又は別表七(四)「10」)	27								1	0	0	0	0
翌期へ繰り越す欠損金又は災害損失金 (別表七(一)「5の合計」)	28												

この金額が100円未満となる場合は記載しないでください。

中間申告により納付すべき法人税額がある場合には、その税額を記載します。  
(注) 納付の有無にかかわらず記載します。

この金額が100円未満となる場合又はマイナスとなる場合は記載しないでください。  
この場合のマイナスの金額は「中間納付額22」欄に記載します。

法人税額



## (2) 法人税申告書の基本的な仕組みと記載の順序

### 【Step 3】別表5(1)、別表5(2)の完成（法人税申告書の完成）

#### ① 別表5(2)…当期に納付すべき法人税及び地方法人税の転記

税目及び事業年度			期首現在 未納税額 ①	当期発生税額 ②	当期中の納付税額			期末現在 未納税額 ①+②-③-④-⑤ ⑥
					充当金取崩し による納付 ③	仮払経理に よる納付 ④	損金経理に よる納付 ⑤	
法地 人方 税法 及人 び税	当期分	中	XXX円	XXX円	円	円	円	円
		間						
	確	定						
	計			113,800				113,800

(二) 令四・四・一以後終了事

法人税及び地方法人税の合計額（別表1「15」欄と「41」欄の合計額）を記載します。  
また、この金額を別表5(1)「27」欄の「当期中の増減（増）③」の「確定」欄に転記します。

#### ② 別表5(1)…別表5(2)から転記

未 納 金 額 （ 退 職 年 金 ）	未納法人税及び 未納地方法人税 （附帯税を除く。）	27	△	XXX	△	XXX	中間	△	△	113,800
							確定	△		

#### ③ 別表5(1)・別表5(2)の残余の項目を記載

#### ④ 添付書類の確認

#### ⑤ 法人税確定申告書の完成⇒確定申告書の提出期限（15ページ参照）までに納税地の所轄税務署に提出してください。